

【主題】 主体的に考え、表現する児童の育成

【副題】 ～自ら決める、自ら学ぶ、共に深める単元・授業デザインを通して～

【学校・団体名】 羽咋市立粟ノ保小学校

【役職名・氏名】 校長 田中 利弘

1 はじめに

本校は羽咋市南部の田園が広がる小高い丘に立地している。在籍児童数は、8クラスで全校児童70名の小規模学校である。昨年度は、2・3年生の複式学級があったが、令和6年度いったんは解消されている。1クラス7人～16人と少ないため、全職員で全校児童を指導する意識が高く、きめ細かな指導・支援が行き届いている。反面、主体性の弱さも感じている。考えられる理由としては、失敗を恐れる心があるのではないかと考えている。自分の考えが間違っていたり、人の意見と違っていたりするのをいやがる姿が見られる。考えの違いから自信がない児童も見られる。小規模校ゆえのみんなと同じでないと不安になる傾向が認められるのである。素直で先生の話もよく聞く児童たちではあるが、これからの予想できない世の中をたくましく生き抜いていくためには、主体性をより育てていく必要があると感じている。

本校の所在である羽咋市は、デジタル教育を早くから推進している。タブレット端末を活用し、児童が主体的に学び・考える学習環境の中で、最適な学習方法を選択し、自ら学びを深める力を身につけさせていくことを目指している。

前述の本校児童の実態と課題、そして将来の求められている能力を踏まえて、本校で身につけさせたい資質・能力を「主体性」「言語能力（対話力）」の2つを設定した。これらは、重なり合う点で共通部分が多いと考えている。つまり、主体的でないと対話も生まれない。逆に対話が成立している時点で主体的であると言うことである。対話が生まれるためには、お互いに「聞く」「話す」が基本であり、他者の考えを理解しようとしなければならない。

2 研究仮説

(1) 学習計画や単元、授業の流れを児童が自己決定する場面をつくとともに、どんな力をつけたいのかを児童と共有することによって、児童が主体性をもって学習に取り組むことができるであろう。

(2) 児童の実態を踏まえてつけたい対話力を設定し、

一単元、一時間の授業の中で対話力を高めるための活動を計画的に行うことによって、確実に児童の対話力を高めていくことができるだろう。

3 研究の重点

- (1) 「協働的な学び」を実現するための対話力の向上
- (2) 児童の主体性を高めるための単元授業デザイン
- (3) 児童の実態に合わせた「個別最適な学び」を実現するための指導の工夫
- (4) ICTを活用した確実な学力の定着

4 めざす児童像

- (1) 未知に対してねばり強く主体的に学ぶ
- (2) 根拠や理由を明確にして考える
- (3) 必要な事柄を用いて筋道立てて表現する

5 実践へ向けて

学校研究を推進していく上で、職員間で「主体性」「言語能力（対話力）」のとらえ方を統一することが必要であるが難しい。そこで、研究主任による単元計画の作成の時間を設定し全職員で参観することで、イメージを持つことができた。共通理解してはじめて共通実践を試みることができるのである。

主体性を身につけさせるためには、教師が学習の流れを示す単元計画作成することである。学期に1回児童と話し合いながら計画することとした。

これまでは、新しい単元の学習計画は教師サイドで作成していた。これを児童と共有することで学びの見通しをもつことができるように計画した。これが単元デザインシートである。

子どもたちの実態に合わせ、単元のゴールを示し、到達するためには何が出来なければならないか、一人でできるか、友だちと協働するか、みんなで学びたいなど、どのようにして学習を児童に委ねさせるのかを想定するものである。



児童に単元の中のどこで主体的な学びを入れられるのかを計画することで、教師も教材研究を深めておかないといけない。本時レベルでは、自分で課題を作り解決していく時間も出てくる。児童は、自らの学びを自己決定し、選択するので課題に対しての自分の考えを必然的に持つことになり、「主体性」を育てることにつながると思う。

下記は、児童と共に作成した単元デザインシートである。シートの右側には、それぞれの時間の振り返りを記入していく。振り返りの内容が重要であり、その時間の学び方について記入することで、次回からの問題解決に向けてどのように学んでいけば良かったのか何がまずかったのかを自分で理解できるのである。その繰り返しの学びこそ「主体性」につながるのである。児童の学び方の深まりを期待している。



対話で学びを深めるためには、「聞く」「話す」が基本であり、他者の考えを理解しようと聞かなければ生まれるはずがない。一方通行の話で終わってしまいます。本校でも以前から継続していた聞き方・話し方があるが、それを基本にバージョンアップし、次の表を作成した。全校での共通理解・共通実践を試みた。

児童に身に付けさせたい対話力

<p>(聞く)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆他者の意見を受け入れる =「共感力」 ◆正確に聞き取る =「聞き取り力」 ◆的確に突っこみ、質問 =「突っこみ力」 	<p>(話す)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆自分の言葉で説明 =「説明力」 ◆他者の考えを取り入れる =「吸収力」 ◆教え合う、補い合う =「付け足し力」
<p>(ベース)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆自分の心をコントロールする=「調整力」 ◆進んで他者と関わろうとする=「積極性」 	

職員はもちろんのこと、全校児童に共有してもらうことで共通実践ができる。実際に児童による寸劇を取り入れた「学びアップ広場」学習オリエンテーションを実施した。



このことは、学校全体であしなみをそろえて学習を進めるねらいがある。さらに、研究からこれまでの児童や教師のアンケート結果を紹介し、自分たちの実態や傾向を児童自身が知る機会とした。職員、児童共に「主体性」「言語能力(対話力)」を身につけていくことの方向性を共有した。

学習オリエンテーションを受けて、この対話をベースに授業を進めていくが、児童が使いこなすまでには難しい。そこで、授業中以外にも日常化させ慣れさせるというねらいで、毎日の帰りの会を利用してペアやグループに対話テーマを与えて習慣づけている。

授業は教科のねらいを達成しなければならない。対話することが目的にならないよう注意が必要になってくる。授業における対話のポイントとしては、「何のために誰と協働するのか」、「そのためにどんな対話があれば良いのか」などの視点が必要である。



なお、本校では対話はペアやグループはもちろん一人の考えを全員で聞き、そこから「どうしてそう思ったの」「それってどういうこと」などの子ども同士でつなげていく過程も対話として捉えることとした。教師のコーディネート力が鍵となる。

6 実践事例

紹介する事例は、令和6年度1学期に実践した授業である。

(1) 6年算数「分数でわる計算を考えよう」

今年度単元デザインシートをもとにした実践である。8時間の授業計画である。単元のゴールは「整数・小数・分数、かけ算、わり算が交じった計算をマスターしよう」である。1つの式に整数、小数、分数が混じっていてもかけ算、わり算ができるために、クラスでどのような学び方をしていこうかの計画である。

導入である第一次では、既習の学習を生かして分数のわり算の解き方を考えた。被除数と除数に同じ数をかけても商が変わらないというわり算の性質を利用したり、面積図を利用したりする方法を比較することを通して、分数のわり算は除数の逆数をかける計算になることが理解できた。

第二次では、主体性を身につけさせるために、自由

進度学習を行った。整数÷分数の考え方、帯分数の入った分数のわり算、真分数でわった場合の商と被除数の関係について、個人でやることの計画を立て考えさせた。学び方を自己決定するのである。教師は、机間支援しながら進度や理解度を見取り、必要に応じて助言していく。また、学び方の選択を与え、廊下に動画を視聴できるブースを作ったり、児童同士が自由に知り合いながら学んだりすることができるように支援をした。



本時は、小数と分数が混在し、乗除が交じった計算の仕方について考え、学習の見通しを立てさせ、板書を残しておくことで、次時の活動のヒントとした。

続いて、 $0.2 \div 2/3 \times 3$ の計算を考えさせ学校研究と関連して、 $0.3 \div 3/2 \times 3$ の解き方と $0.2 \div 2/3 \times 3$ の解き方とを比較することを通して、小数と分数と整数が混在し、乗除が交じった計算を解くときのポイントについて、学びを選択し、対話で学びを深める児童が多く見られた。



いくつかの考え方を比較することを通して、「小数では表せない数も分数では表すことができること」「分数の計算にすることによって、途中計算での約分が可能になること」に気づき、乗除法を分数の場合の計算にまとめることのよさを感じていた。

(2) 2年算数「分数でわる計算を考えよう」

長さの学習では、cmやmmの単位を混同した児

童や、ものの長さの量感を捉えられていない児童がいた。水の体積でもかさの単位で混同が予想され、かさの量感も捉えにくかった。

単元のゴールを「いろいろな水のかさをはかり、かさの単位を使って表す力をつけよう」とした。普遍単位の dL や L, mL を導入するにあたって、長さの学習での 1cm や 1mm のいくつか分という測定活動を繰り返すことで、かさも 1dL のいくつか分という測定の考え方を引き続き用いることができるのである。

本時では、主体性を身につけさせるために、意図的に違う単位どうしを計算している誤答を提示することで、誤答理由を相手意識をもって説明できるように工夫した。「だって」と意欲的に説明しようとする児童が多く見られた。また、長さの学習を想起させ、リットルますやデシリットルます、図などを準備しておくことで、L や dL がいくつか分あるかを考えればよいことに着目させ、それらを用いて考え方を説明できるようにした。このように、児童の予想する反応を理解し、教材研究を深めておくことが肝要である。準備が出来るからこそ、児童の主体性を身につけさせる手立てを打つことができるのである。

途中発展問題で、単位換算が伴うひき算の問題を提示することで、計算の仕方を互いに説明し合い、理解を深めるようにした。このことは有効であった。児童は、学びを選択しノートで考える、グループで集まり相談する、デシリットルます、リットルますを手にして考えるなど、多様な学び方が広がった点では対話による深い学びをにつながる姿ではなかったか。



任意単位の測定では、体積の大小が比べられないことや、単位とするものがみんな持っている物とは限らないという問題点から共通の普遍単位の必要性に気付かせることができた。この場面では、1リットルが10デシリットルであることを説明できるかがポイントであった。



また、調べる体積が大きくなると、デシリットルますを使っての測定することに時間がかかったり、数値が大きくなりイメージしにくくなるという問題点から上位単位の必要性に気付かせていった。1dLより少ない体積はどう表現するのか、長さの測定での経験を想起させながら、下位単位の必要性に着目させる。測定活動では、測定だけでなく、予想と実測を交互に繰り返すことで、水の体積の量感を養った。



本時の対話で学びを深めさせるために、計算の仕方をリットルますやデシリットルます、ますの図などを用いて操作活動をすることで、同じ単位どうし計算することを視覚的にも量感覚を伴って考えさせた。復唱や繰り返し説明させることで、相手意識があり理解しようとする姿があり、学び合いや対話につながった。

7 検証・考察

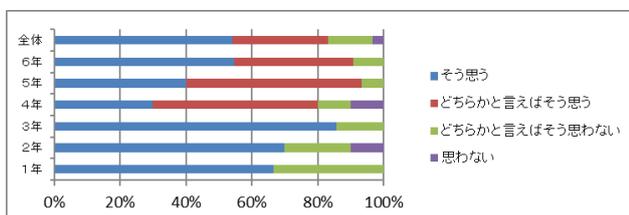
(1) 1学期児童アンケート

学校研究の検証を1学期末実施した。本研究の検証として2点に焦点を当て、結果を総括し分析とした。

まず、「主体性を高めるために」についてである。関係する児童のアンケートの結果は以下の通りである。

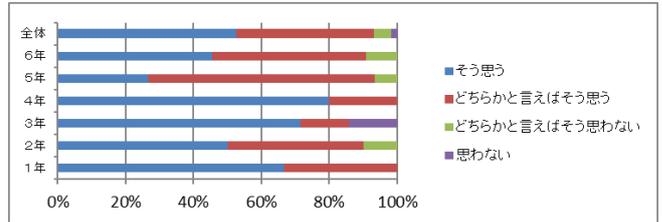
①主体性を身につけさせる項目について

【児童】進んで発表しているか。



低学年が高いことが分かるが、高学年も、どちらかといえばそう思うを加味すると80%を超える。主体性を図る目安としては、意欲が高いと判断できる。

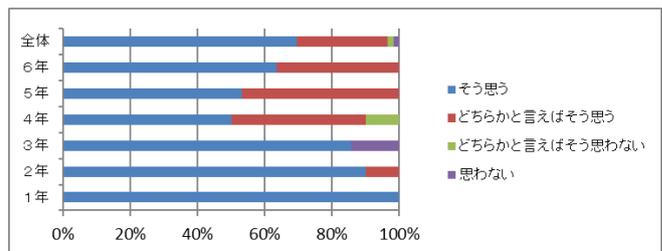
【児童】ICTを活用しているか。



全学年どちらかといえばそう思うを加味すると90%を超えている。この2つの項目結果から、単元デザインを基に、自己決定の課題を取り入れる授業を計画すると、ICTを活用しながら進んで発表する児童が多く見られることが読み取れる。

②続いて、対話で学びを深める項目について

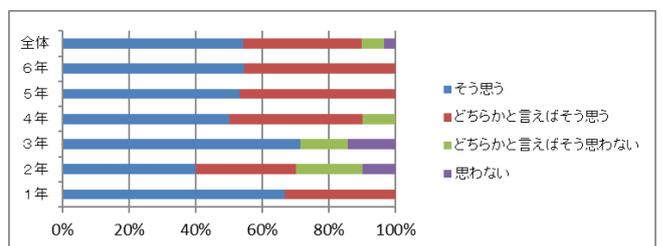
【児童】説めい人を使って分かりやすく説明できるか。



全学年でどちらかといえばそう思うを加味すると90%を超えている。授業でペアやグループ、全体での個人の考えを分かりやすく説明しようとしている児童が多く見られると考える。

【児童】TTATは自分の学習に役立っているか。

このTTATとは、タブレットを見せながらペアやグループで対話をするということである。



8 今後に向けて

2つの仮説を立てながら学校研究を進めている途中である。重視している取組は、単元デザインシート作成である。今後も児童が主体的に学び方を自己決定しながら、学びを深められるように、教師は児童のよき伴奏者としての立ち位置で、引き続き研鑽を積んでいきたいと肝に銘じているところです。